

	にしむら きみひろ
氏 名	西村 公宏
授 与 学 位	博士 (工学)
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項
研究科, 専攻の名称	東北大学大学院工学研究科 (博士課程) 都市・建築学専攻
学 位 論 文 題 目	近代日本の大学附属公開施設に関する建築史的研究
指 導 教 員	東北大学教授 飯淵 康一
論 文 審 査 委 員	主査 東北大学教授 飯淵 康一 東北大学教授 近江 隆 東北大学教授 菅野 實 東北大学助教授 永井 康雄

論 文 内 容 要 旨

序

近年、日本の各大学、特に戦前より存続している旧制大学を母体としている大学においては、ユニバーシティミュージアムの構想もしくは建設が相次いでいるが、今後、ユニバーシティミュージアム等をより有意義な施設として活用していくためには、近代において大学が社会といかに向き合っていたかを問い直す歴史的な研究も必要であろう。既往の研究において一部、大学附属公開施設に触れているものも見られるが(磯野直秀氏、遠藤明久氏等)、施設公開の観点からの詳細かつ包括的な研究はほとんどなされていない状況にある。本論文では、近代日本における大学附属公開施設の建築の詳細ならびに公開の状況等について、建築史的視点からその成立と展開の過程を明らかにし、ユニバーシティミュージアムの今後の整備に資することを目的としている。本論文は、2編全4章の構成となっている。第1編では大学附属臨海実験所水族館(8施設)を、第2編では大学附属博物館(5施設)を取り上げ、各編ともその成立及び確立、展開の過程を詳細に検証し、得られた知見を小結とし、さらにこれらをまとめて結とした。

第1編 大学附属臨海実験所水族館

第1章 大学附属臨海実験所水族館の成立

本章では、わが国初の臨海実験所である東京帝国大学理科大学附属臨海実験所(三崎臨海実験所)水族飼養室を取り上げた。三崎臨海実験所には、明治20(1887)年の開設時より水族飼養設備が設けられており、所内の見学も認められていた。明治42(1909)年には、木造平家建61.5坪の水族飼養室が竣工した。この建物には、横から覗く形式の観覧水槽、床水槽及び卓上水槽が配されていたが、これらは、パリ(ソルボンヌ)大学附属のそれらとの部分的な類似が見られた。水族飼養室の設計には、社会教育施設に関する造詣が深い同大学教授飯島魁が関係していた。明治31(1898)年起草の飯島による水族室設置に関する要望書に添付された図面からは施設公開に関する意図を読み取ることができる。その観覧を意識した設計は、上述した明治42(1909)年の設計にも共通するものであった。つまり、水族飼養室は研究のみならず公開も意図した施設であることが明らかになり、ここに、大学附属臨海実験所水族館の成立を見ることができる。なお、建築は同大学技師山口孝吉が率いる臨時建築掛が担当した。

第2章 大学附属臨海実験所水族館の確立、展開

本章では、大正期及び昭和前期に開設された大学附属臨海実験所水族館8施設を取り上げた。大正

11(1922)年開設の京都帝国大学理学部瀬戸臨海研究所(瀬戸臨海研究所)には、木造平家建 57 坪の水槽室が設けられたが、三崎臨海実験所のそれと類似した内部構成であった。一方、大正 13(1924)年開設の東北帝国大学理学部附属臨海実験所(浅虫臨海実験所)には、レンガ造 72 坪の水族館が併設されていた。この建物はアーチの連続やステンドグラス等、装飾性豊かな外観を有し、一部アムステルダムやニューヨークの水族館と類似したホール、大型の観賞用水槽による水族室及び陳列室より構成されており、大学附属臨海実験所水族館の確立を見るにふさわしい施設であった。同大学教授畑井新喜司は、一部反対はあったものの、学問の普及と研究のために公開の水族館は必要不可欠であるという信念に基づき計画を進め、建築は同大学営繕課技師の小倉強が担当した。竣工後の水族館は盛況で、水族館は学問の普及や研究に加え、地域の振興にも資することとなった。

昭和期に入ると、大学附属臨海実験所水族館は多様な展開を見せる。浅虫の後を追うように、三崎では昭和 3(1928)年に、瀬戸では昭和 6(1931)年に有料公開に踏み切っており、昭和 6(1931)年開設の北海道帝国大学理学部附属臨海実験所(厚岸臨海実験所)にも、有料公開の円筒形の水族室(65.5 坪)が設けられていた。この建物は、鉄筋コンクリート 3 階建、表現主義風な構成、機能主義的な意匠を有し、一部にアール・デコ風の装飾も施される等、観覧を強く意識したものであった。設計は同大学理学部教授の小熊捍の発案により同大学営繕課長萩原惇正、技手岡田鴻記が担当した。

昭和 7(1932)年、三崎臨海実験所には、既存建物の北側に新しい水族室及び標本室が設けられた。この配置計画は、観覧者と研究者の動線の分離が意図されたものとなっていた。建物は、鉄筋コンクリート 2 階建延 112 坪、レンガタイルを貼った構成主義的な外観を有していた。平面、内部については、浅虫臨海実験所のそれとの類似性が見られたが、当時の大学関係者が浅虫の影響を受けていた点を「帝國大學新聞」等の資料より明らかにした。設計は同大学営繕課技師清水幸重及び囑託桑田貞一郎が、同大学理学部助教授恵利 恵と協議する形で進められた。恵利は、公開の意義を「文化人たる知識の向上」に置いていた。

瀬戸臨海研究所においても、昭和 8(1933)年及び昭和 10(1935)年には増築がなされ木造平家建 112.5 坪の水族館となり、観覧専用の通路も設けられた。平面及び内部については、中型水槽が増加した点が注目される。これらは、プリマス臨海研究所のそれとも類似するものであった。同大学理学部教授駒井卓は、水族館の観覧者に対し、「研究的態度」を以って水族館を観覧することを望んでいたが、この考えは分類学を意識したとも言える中型水槽の整備に影響を与えたと考えられる。なお、建築については、創設時は同大学技師永瀬狂三が、増築時は、同技師大倉三郎等が担当した。

昭和 8(1933)年には、東京文理科大学附属臨海実験所(下田臨海実験所)及び広島文理科大学附属臨海実験所(向島臨海実験所)が開設されている。下田臨海実験所は木造 2 階建一部平家建延坪 100 坪の有料公開の水族館が正門とほぼ一体となるように配されていた。平面、内部は、浅虫や三崎の新しいそれとの類似性が指摘できるが、館内に研究室を有している点が異なっていた。向島臨海実験所には木造平家建本館東端に中型水槽等を有する水槽室(27.7 坪)が設けられたが、地元では浅虫のような、地域に人を呼べる水族館を望んでいた。

昭和 11(1936)年には、東京帝国大学農学部附属水産実験所(新舞子水産実験所)が開設され、十字形の鉄筋コンクリート造 305.6 坪の水族館が併設された。この建物は、中心部がホールで、これより四方に伸びる翼には、観賞用の水族室が配されていた。この平面構成は世界一の規模と称されたシカゴのシェッド水族館(1929 年竣工)のそれとの類似性が指摘されているが、円形水槽を有するホールと観賞用水槽による水槽室の組合せは、すでに、浅虫のそれにおいて実現していたことは注目されよう。同大学農学部教授雨宮育作は、水族館開設の目的として、社会、民衆教育への貢献等を上げており、

建築は久米権九郎が担当した。

九州帝国大学附属天草臨海実験所（天草臨海実験所）は、昭和 3(1928)年 4 月開設で、昭和 13(1938)年には、公開の水族室を有する木造平家建の実験室が設けられた。この水族室(18 坪)は、水族館等が立地しない地方において動物学普及に役立ったと考えられる。建築は同大学建築課嘱託萱島一夫が担当した。

第 2 編 大学附属博物館

第 1 章 大学附属博物館の成立

本章では、東京大学理学部博物場及び東北帝国大学農科大学附属博物館を取り上げた。

明治 13(1880)年開場の博物場は、木造 2 階建延 440 坪、西に開くコの字型平面の建物で、各室は「博物標品陳列室」に当てられていたことを明らかにした。設計は、東京大学理学部教授のモースがコの字型平面を有するハーバード大学の“UNIVERSITY MUSEUM”を参考に行ったと推察され、東京大学宮繕掛の六等書記井上工一や小林佐吉も関係していたと考えられる。博物場の利用者数は、大学側が意図した数よりは少なかったが、それらの多くは博物場側でも利用を想定していた篤志者であった。博物場ではこれら篤志者の利用を好意的に受け止めていた。明治 17(1884)年 4 月からは、学内関係者と同じ平日利用が実現したことも併せて指摘した。博物場では各教場の標本を一括しており、専任もしくは兼任の職員が配されたが、この充実した業務体制の下で博物場の公開は実現したと言えよう。

東北帝国大学農科大学附属博物館は、札幌農学校附属博物館を前身として、明治 40(1907)年開設された木造 2 階建延 158.8 坪の建物であった。農科大学の各教室は、博物館とは別に独自の標本室を有しており、博物館は、各教室からは独立した施設であったことを明らかにした。博物館が広く一般に開かれた要因の 1 つはこの点にあったと考えられ、ここに大学附属博物館の成立を見ることができよう。

第 2 章 大学附属博物館の確立、展開

本章では、大正後期以降開設の、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、早稲田大学文学部史学科陳列室及び広島文理科大学附属教育博物館を取り上げた。

昭和 3(1928)年開設の演劇博物館は、専門の図書室の設置、整理室や職員室を展示室等に隣接して設ける等、研究、教育、展示の機能性をより重視していた。大学附属博物館の確立は、この施設に見ることができよう。

そして、史学科陳列室については、早稲田大学文学部教室の 2 階北端の室(17 坪)に設けられたが、この位置は校庭側の玄関に近く公開に適していたこと、また、教育博物館については、木造 2 階建延 190 坪、室数 13 室の内、展示室は 9 室であり、展覧会を重視した活動により、大学内における学問の情報発信を助けた点を指摘した。

結

各編で得られた知見を要約した。

以上、大学附属公開施設は、明治期から大正・昭和期にかけて公開に対してよりふさわしい建築的構成をとり、施設公開に対する意図も明確になっていったことを明らかにした。

論文審査結果の要旨

本論文は、ユニバーシティミュージアムを含めた大学附属公開施設のあり方を検討する立場から、近代日本に於ける大学附属公開施設の建築的詳細ならびに公開の状況等について、建築史的観点からその成立と展開の過程を明らかにしたものである。従来このような観点からの包括的研究は殆どなされてこなかった。

本論文はこれらの研究成果を纏めたもので、全文、序、第1編、第2編、結より構成され、第1、2編はそれぞれ第1章、第2章より成っている。

序は本研究の背景及び目的等について述べたものである。

第1編では、大学附属臨海実験所水族館を取りあげている。

第1章では、明治期に開設された東京帝国大学理科大学附属臨海実験所に着目し、水族館の整備過程を詳細に跡づけ明らかにしている。

第2章では、大正から昭和期にかけて順次成立していった京都帝国大学理学部、東北帝国大学理学部、北海道帝国大学理学部、東京文理科大学、広島文理科大学、東京帝国大学農学部、九州帝国大学のそれぞれに附属した臨海実験所の水族館を対象としている。

大学附属臨海実験所水族館は、明治期から大正・昭和期にかけて公開に対してより相応しい建築的構成をとり施設公開に対する意図も明確となっていったことを明らかにした。第1章、第2章で取りあげた水族館をそれぞれ成立期、確立・展開期のものとしてとらえることができる。

第2編では、大学附属博物等を取りあげている。

第1章では、明治期に開設された東京帝国大学理学部博物場及び東北帝国大学農科大学附属博物館に着目し、建築的実態および公開の状況について明らかにした。

第2章では、大正から昭和期にかけて成立した早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、早稲田大学文学部史学科陳列室及び広島文理科大学附属博物館を対象とした。

大学附属博物館は、明治から大正・昭和期にかけて成立、確立・展開され、公開に相応しい建築的構成となっていったことを明らかにした。

以上要するに、本論文は建築史的観点からは殆ど取りあげられなかった近代日本における大学附属の公開施設について、主として歴史的資料を用いて成立と展開の過程を詳細に明らかにしたものであり、建築学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認める。